

幻影の日本・憧憬の西洋

—清原 / ラグーザ玉とヘレン・ハイドを中心に—

2024 年 10 月 5 日（土）～ 11 月 23 日（土）

実践女子大学香雪記念資料館 企画展示室 1・2

謝 辞

本展覧会の開催にあたり、貴重な作品をご貸与くださいましたご所蔵機関、個人の方々、ならびに多大なご協力を賜りました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

東京国立博物館 東京藝術大学大学美術館 塩谷 純 古田 亮

（敬称略）

本展は、清原玉（1861-1939、エレオノーラ・ラグーザ）とアメリカ人の版画家ヘレン・ハイド（1868-1919）の作品を中心に、明治初期から洋画を学んだ日本人女性たちの作品、海外から日本に来て木版画を日本で制作した女性たちの作品を加えて構成しています。日本の女性たちが新しく触れた西洋画に憧れ、西洋画の修得を通して西洋の人物や風景の見方を学んだ様子をみていきます。一方で欧米から日本に来た女性たちの版画からは、彼女たちが日本の風俗や木版画という技法に魅せられて制作した様子をみることができます。清原 / ラグーザ玉は日本から西洋、西洋から日本へのまなざしの双方を持ちました。玉とヘレンは女性や子供、花など、女性画家にふさわしいとされる主題を取り上げた点が共通しますが、男性を描いたエリザベス・キースの作品は異色です。異文化との間で交錯するまなざしについて考える展覧会です。

記載は解説に続けて、作品番号、作家名、作品名（原題がある場合はこれを併記）、制作年、技法・材質、寸法、所蔵者等を記しました。また、展示作品の一部は画像を掲載しておりません。

1 章 いち早く西洋画を学んだ女性たち

渡辺幽香（五姓田 / 渡辺勇子）（1856-1942）

幽香は雅号。幼名たつ、後に勇、または勇子。父、五姓田芳柳（1827-92）が横浜で西洋画風の陰影を施した緻密な人物肖像画を描いて外国人向けに販売し、成功。幽香も家業として絵を学び描いた。夫渡辺文三郎も芳柳の弟子である。兄義松（1855-1915）は来日中のイギリス人報道画家チャールズ・ワグマンに師事して油彩画を身につけ、高い油彩画技術によって皇室からも評価された。1880年に渡仏しパリではレオン・ボナの学校で学んだ。幽香も義松から写実的でアカデミックな油彩画表現を学んだとみられ、1回から3回までの内国勧業博覧会、シカゴ・コロンプス世界博覧会の婦人館への出品をおこなっている。近年発見された《山内市郎治像》（1878年、神奈川県立歴史博物館）、《西脇清十郎像》（1881年、同館）は迫真的な描写がなされており、幽香が肖像画家として高い実力を蓄えて注文に応えていたことを示す。《人物》も濃い褐色の地塗りに明るい色で描く正統な油彩画技法によって描いており、侍姿の男性の顔貌や手の骨格を正確に把握している。烏帽子の艶や着物の布の織り柄や衣服の描写も精緻に再現されており、技量の高さを伝える。一方で、頭部に対してがっちりと幅広い肩、安定した上半身のプロポーション、彫りの深い顔だちには西洋の美術の規範による理想化がなされている。油彩画技術を学ぶことを通して幽香が西洋人のまなざしを身につけて日本人を捉えなおした表現を読み取ることができる。

【主要参考文献】

『五姓田のすべて—近代絵画への架け橋—』神奈川県立歴史博物館、2008年。
『近代日本の視覚開化 明治 呼応し合う西洋と日本のイメージ』愛知県立美術館、神奈川県立歴史美術館編、愛知県立美術館、2023年。

No.10

渡辺幽香

《人物》

明治時代
油彩・カンヴァス
77.7 × 56.3cm
東京藝術大学



工部美術学校に学んだ女性たち

明治政府が設置した工部美術学校は、日本で初めて本格的に西洋美術を教育する機関である。1876年にイタリアから画家アントニオ・フォンタネージ、彫刻家ヴィンツェンツォ・ラグーザ、家屋装飾教師としてジョヴァンニ・ヴィンツェンツォ・カペレッティの3人の教師を招聘し、絵画、彫刻の教育をおこなった。ここでは男子クラスの開校に少し遅れるものの、1876年12月に女子学生の入学規則が作られ女生徒たちが入学した。1878年初秋にフォンタネージ離日に際して撮影されたとみられる集合写真には、この時点で在籍していた6人が写っている。

その一人、大鳥雛（1861-1923）は、大鳥圭介の長女で、1879年1月に退学した。大鳥圭介は、幕臣でフランス式の兵学を学び指揮したが、明治政府のもとでは1885年工部省に出仕し、工部寮の長である工学頭となり、工部美術学校校長であった。

秋尾 / 中島園（c. 1863-1929）は女生徒のなかで最も年下だった。父利義は武士で幕府陸軍士官。馬術指南役、維新後は陸軍士官学校教官。園は1880年頃退学し、写真家で後に幻燈制作者となる中島精一と結婚。園も幻燈機の種板（ガラスのスライド）の下絵や着色を担当したとみられている。秋尾の資料のなかには、1877年9月から1878年にかけて工部美術学校の予科（基礎学）で制作した課題画が含まれており、基礎教育の学習内容を知ることができる。図形を描く幾何学、遠近法、連続模様を描く飾画の3種類を同時に学んでいたことがわかっている。海外の手本を模写する学習が多かったが、实景の写生もおこなっていたとみられる。また女子学生仲間をスケッチした作品からは、のびのびと学んでいた様子をうかがうことができる。

工部美術学校女生徒
後列右から秋尾園、大鳥雛、
フォンタネージ、
山室（岡村）政子



山室政 / 岡村政子 (1857-1936) の父は信州岩村田藩の家臣。江戸詰であったが維新後は信州に住み、政子もそこで育ったが単身上京。神田のニコライ女子神学校に学び洗礼を受ける。絵画の才を認めたニコライからイコンの画家となることを期待され、工部美術学校に学ぶが、1879 年頃退学して岡村竹四郎と結婚。夫と京橋に石版印刷業の信陽堂を開いた。政子も一枚刷りの石版画の下絵を描いたが、人物の表現には西洋美術教育を受けた成果がみられ、骨格や立体感を正確に描き出している。また風景描写にも西洋的な空間表現がみられる。その一方で、少女のプロポーションや日本人ばなれした大きな目や長い睫の描写にはどこか西洋人風に理想化がなされており、政子もまた西洋画を学ぶことを通して西洋風のものの見方を身につけ、日本人の身体を捉え直していたことをうかがわせる。

【主要参考文献】

金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』中央公論美術出版、1999 年。

金子一夫「秋尾園と工部美術学校」『近代画説』24、2015 年、p. 4-33。

No.1

秋尾 園

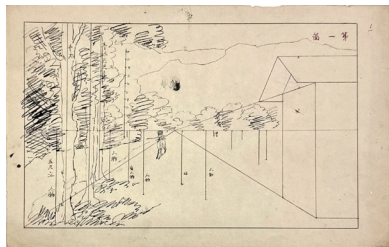
《(遠近法) 第一図》

明治 10 (1877) 年 9 月

インク・紙

18.8 × 29.6cm

個人蔵



No.2

秋尾 園

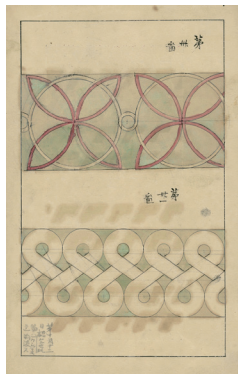
《飾画 第三十図、第三十一図》

明治 10 (1877) 年 10 月 12 日

インク、油性絵具による着彩・紙

29.6 × 18.6cm

個人蔵



No.3

秋尾 園

《工部美術学校女生徒 1》

明治 13 (1880) 年

鉛筆・紙

29.7 × 23.0cm

個人蔵



No.4

秋尾 園

《工部美術学校女生徒 2》

明治 13 (1880) 年

鉛筆・紙

20.0 × 26.5cm

個人蔵



No.5

秋尾 園

《工部美術学校女生徒 戯画》

明治 13 (1880) 年

鉛筆・紙

18.0 × 53.0cm

個人蔵



No.6

秋尾 園

《風景》

明治時代

水彩・紙

14.5 × 19.2cm

個人蔵



No.7

大鳥 雛

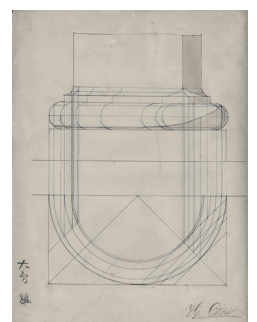
《石柱台座投影図》

明治 11 (1878) 年頃

インク、墨・紙

28.0 × 22.5cm

個人蔵



No.8

岡村政子

《孝子安寿姫弟津志王丸ト訣別之図》

明治 22 (1889) 年 9 月 10 日発行

石版多色刷・紙

34.4 × 27.0cm

実践女子大学香雪記念資料館



No.9

岡村政子

《手鞠》

明治 28 (1895) 年

石版多色刷・紙

33.9 × 24.3cm

実践女子大学香雪記念資料館



2 章 清原 / ラグーザ玉

清原玉 (Eleonora Ragusa, 1861-1939) はラグーザ玉の名で知られる。江戸芝新堀の裕福な家に生まれ、絵を習い栄寿の号を受けている。明治政府が 1876 年に工部美術学校を開き、教師として招聘したイタリア人彫刻家、ヴィンツェンツォ・ラグーザ (Vincenzo Ragusa, 1841-1927) と出会い、ラグーザから洋画技法を学び、ラグーザが収集した古器物の写生図の制作をおこなう。工部美術学校が閉鎖されることになるとラグーザも 1882 年に解任され、故郷シチリアのパレルモに帰国する。ラグーザはその際に玉と姉の千代夫婦を伴い、彼女たちを教師としてパレルモに私設の工芸学校を開いた。1886 年、パレルモ王立美術学校が開校し、翌年王立産業応用美術学校として国の認可を受けると、ラグーザは校長に、玉は女子部校長となった。姉夫婦は帰国するが、玉は 1901 年にラグーザと結婚し、洗礼名エレオノーラを名乗る。教育者として活動する一方、画家としての玉は写実的な肖像画から壁画まで手がけた。残された作品からは確かな技術を持っていたことが明らかである。また日本で学んだ花鳥画の筆法を油彩に応用した衝立などの装飾画も得意とした。晩年には傘を持ち和服姿で花野を散策するような女性を数多く描いた。これは長年日本を離れたことによって玉の記憶のなかの日本人女性のイメージが変容したことも一因であった可能性があるが、同時にイタリアの人々が期待する「エキゾチック」な想像上の東洋人の姿としてこうした作品の需要があったため数多く描いたとも考えられる。玉・エレオノーラ・ラグーザは西洋の眼差しを身につけ主体的に描く女性でありながら、同時にイタリアでは異国の女性であり「清原玉」のサインも用いて想像上の日本を描いた。

彫刻家の畑正吉 (1882-1966) が 1922 年、欧州視察旅行中に玉を訪問したことを伝えてその存在が日本に知られると、文筆家の木村毅が想像を交えて「小説ラグーザお玉」とした新聞小説を 1931 年に 4 ヶ月、80 回にわたり連載した。さらに木村は清原家

に取材をして「実話小説」として『ラグーザお玉』(千倉書房、1931) を出版した。小説が評判になったことから親族の要請で玉が 1933 年 10 月に帰国すると、木村は玉にインタビューをおこない、木村毅編『ラグーザ玉自叙伝』(改造社、1939 年) を出版した。有名人となった玉への注目は大きく「ラグーザお玉夫人絵画展覧会」(1933 年 11 月、銀座伊東屋) が開かれ、没後も「ラグーザお玉夫人遺作展覧会」(1939 年 5 月、日本橋高島屋) が開かれた。

「ラグーザお玉」や「お玉さん」という呼称には画家、教育者としての彼女の業績を矮小化し、揶揄するような響きがあることは否めない。また木村による『ラグーザお玉』の表紙絵(木村莊八)は玉の作品を模写したものだが、本を手取る人にはあたかもそれが玉自身を表しているようにも見えたであろう。木村の創作を交えた語りがその後も長く清原玉の評伝に影響し、ラグーザと恋愛してイタリアに渡った女性の物語として語られた。1986 年の展覧会が没後の遺作展以来初めての回顧展であり充実した内容であった。2017 年にパレルモで大規模な回顧展が開かれたが、日本所在の作品は出品されていない。なお当館所蔵《薔薇》、《シチリア風景》は畑正吉旧蔵品をご寄贈いただいたものである。

【主要参考文献】

『ラグーザ玉展』東京新聞編、小田急新宿店グランドギャラリー、他、1986 年。
児島薫「畑正吉と清原玉、エリザベス・キースとの交友を物語る作品について」『香雪記念資料館館報』13 号、2016 年、p. 47-54。
O' Tama e Vincenzo Ragusa, Un ponte tra Tokyo e Palermo, a cura di Maria Antonietta Spadaro, Palazzo Sant'Elia, Palermo, 2017。
河上眞理「イタリアにおけるラグーザ・玉再考ー池田記念美術館蔵「木村毅旧蔵ラグーザ・玉関係史料」の小野七郎の書簡及び『お玉夫人回想談』からー」『京都芸術大学紀要「Genesis 25」』2021 年、p. 28-40。

No.11

清原 玉

《古器物写生》(KU-d023-03)

明治 13 (1880) 年 4 月

水彩・紙

43.3 × 50.5cm

東京国立博物館

No.12

清原 玉

《古器物写生》(KU-d023-04)

明治 13 (1880) 年 5 月

水彩・紙

43.0 × 49.0cm

東京国立博物館

No.13

清原 玉

《古器物写生》(KU-d023-08)

明治 13 (1880) 年頃

水彩・紙

43.2 × 50.6cm

東京国立博物館

No.14

清原 玉

《古器物写生》(KU-d023-09)

明治 13 (1880) 年 4 月

水彩・紙

43.5 × 49.5cm

東京国立博物館



No.19

清原 玉 / エレオノーラ・ラグーザ

《春》

明治 33 (1900) 年

油彩・カンヴァス

204.1 × 132.1cm

東京藝術大学



No.15

清原 玉

《古器物写生》(KU-d023-10)

明治 13 (1880) 年頃

水彩・紙

43.1 × 49.3cm

東京国立博物館



No.20

清原 玉 / エレオノーラ・ラグーザ

《風景》

大正 9 ～昭和 8 (1920-1933) 年頃

油彩・カンヴァス

100.4 × 130.2cm

東京藝術大学



No.16

清原 玉

《古器物写生》(KU-d023-12)

明治 13 (1880) 年頃

水彩・紙

33.3 × 49.3cm

東京国立博物館

No.18

清原 玉

《古器物写生》(KU-d023-22)

明治 12 (1879) 年 8 月

水彩・紙

43.0 × 49.4cm

東京国立博物館



No.17

清原 玉

《古器物写生》(KU-d023-16)

明治 13 (1880) 年頃

水彩・紙

51.6 × 58.9cm

東京国立博物館

No.21

清原 玉 / エレオノーラ・ラグーザ

《シチリア風景》

昭和 8 ～ 14 (1933-1939) 年

油彩・カンヴァスボード

29.7 × 49.6cm

実践女子大学香雪記念資料館

畑正吉旧蔵



清原 玉 / エレオノーラ・ラグーザ

《薔薇》

昭和 8 (1933) 年頃
 油彩・カンヴァス
 40.9 × 53.5cm
 実践女子大学香雪記念資料館
 畑正吉旧蔵



3章 ヘレン・ハイド

ヘレン・ハイド (Helen Hyde, 1868-1919) は、ニューヨーク州のリマで生まれるが、まもなくカリフォルニア州オークランドに移り、主に西海岸で育った。父は実業家、母は教師で両親ともに芸術に関心を持つ家庭に恵まれ、父の没後は裕福な伯母がヘレンを援助した。サンフランシスコ・デザイン学校で学び、また1888年にはニューヨークに出てアート・ステューデント・リーグに学ぶ。1890年にはベルリンで高等美術学校に入学、さらに1891-94年、パリではラファエル・コランやフェリックス・レガメの元で学んだ。コランには黒田清輝らが師事し、レガメは訪日経験があった。このことがヘレンが日本に関心を持つきっかけであったとされている。1895年にプレス機を購入してエッチングを始め、カラー・エッチングを研究し、版画家として活動が続いていくことになる。1899年、友人のジョセフィン・ハイドと共に初めて日本を訪れると、アーネスト・フェノロサの紹介で狩野友信に絵を学んだ。狩野友信は幕府御用を務めた奥絵師であったが、幕末には開成所で洋画を学び、東京美術学校絵画科でも教えていた。ヘレンは木版画を来日中の版画家エミール・オルリクから学び、彫師、摺師を雇い、自ら監督して制作した。またバーナード・リーチとも交流しアクアチントの技法を研究している。1914年まで日米を往復しながら木版画、銅版画を制作したが、健康状態の悪化と日本への関心が薄れたことから、1914年に米国に帰国し、1919年、死去した。没後の1920年にはシカゴ美術研究所で回顧展が開かれた。

ヘレンは小さい無邪気な子供たちや子供を愛しむ母子像を繰り返

返し描いたが、それは子供を無垢な存在とする考え方や、母性愛を賞賛する当時の保守的な家庭観を反映していた。また人物は細くつり上がった目で表され、子供たちは明治中期には廃れていた唐子風の髪型で表され、東洋人であることが強調された。また前近代的な風俗や自然とともに描かれた。ヘレン自身は結婚せず、多くの画商や個人を相手に自作の制作と販売を計画的におこない、版画家として自立した生活を送ったので、こうした表現は主な顧客であった欧米の人々の期待に応えるものであったとみられる。

これまでヘレンの作品としては木版画がよく知られてきたが、銅版画家としての活動も重要である。今回展示される銅版画の作品の中には最終的にカラー・エッチングで仕上げられる途中の段階とみられるものもあるが、こうしたものも値段が付けられ販売されていたことがわかる。

【主要参考文献】

Julia Meech and Gabriel P. Weisberg, *Japonisme Comes to America: The Japanese Impact on the Graphic Arts 1876-1925*, Harry Abrams, New York, 1990. 日本語版は『青い目の浮世絵師たち アメリカのジャポニスム展』世田谷美術館、1990年。
 『アジアへの眼 外国人の浮世絵師たち』横浜美術館、1996年。
 Tim Mason and Lynn Mason, *Helen Hyde*, Smithsonian Institution Press: Washington and London, 1991.
 Shiloh McMurtrey, "Helen Hyde and Her "Children": Influences, Techniques and Business Savvy of an American Japoniste Printmaker" PhD. Dissertation, Arizona State University, 2016.

ヘレン・ハイド

《冬》

Winter
 明治 34 (1901) 年
 木版多色摺・紙
 18.5 × 37.5cm
 杜若文庫



ヘレン・ハイド

《入浴》

The Bath
 明治 38 (1905) 年
 木版多色摺・紙
 41.5 × 26.1cm
 実践女子大学香雪記念資料館



No.25

ヘレン・ハイド
《家路》

The Return
明治40（1907）年
木版多色摺・紙
39.0 × 21.2cm
杜若文庫



No.29

ヘレン・ハイド
《六月のある日》

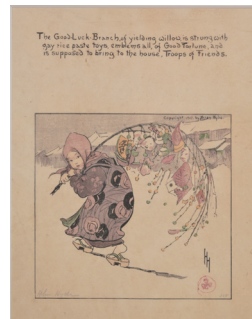
A Day in June
明治43（1910）年
木版多色摺・紙
37.2 × 16.9cm
実践女子大学香雪記念資料館



No.26

ヘレン・ハイド
《福笹》

The Good-Luck Branch
明治40（1907）年
木版多色摺・紙
15.6 × 16.7cm
実践女子大学香雪記念資料館



No.30

ヘレン・ハイド
《花と子供》

Blossom Child, (Uncolored)
明治35（1902）年
エッチング・紙
17.5 × 15.0cm
杜若文庫



No.27

ヘレン・ハイド
《かたこと》

Baby Talk
明治41（1908）年
木版多色摺・紙
28.8 × 46.4cm
実践女子大学香雪記念資料館



No.31

ヘレン・ハイド
《戦争マーチ》

Marching as to War, (Uncolored)
明治37（1904）年
エッチング・紙
15.0 × 10.0cm
杜若文庫



No.28

ヘレン・ハイド
《夏のわか雨》

A Summer Shower
明治42（1909）年
木版多色摺・紙
12.3 × 33.9cm
実践女子大学香雪記念資料館



No.32

ヘレン・ハイド
《春の詩》

A Spring Poem, (Uncolored)
明治39（1906）年
エッチング・紙
20.5 × 21.6cm
杜若文庫



No.33

ヘレン・ハイド

《東京の雨の夜》

Rainy Night in Tokyo

明治 39 (1906) 年

エッチング、アクアチント・紙

29.0 × 12.6cm

杜若文庫



No.35

ヘレン・ハイド

《赤い傘》

The Red Umbrella, (Uncolored)

明治 43 (1910) 年

エッチング・紙

30.5 × 10.0cm

杜若文庫



No.34

ヘレン・ハイド

《ゴブリン・ランタン》

Goblin Lantern

明治 39 (1906) 年

エッチング、アクアチント・紙

18.6 × 18.9cm

杜若文庫



No.36

ヘレン・ハイド

《竹垣》

The Bamboo Gate

大正 4 (1915) 年

エッチング、アクアチント・紙

17.6 × 12.5cm

杜若文庫



4 章 アジアを旅した外国人女性版画家たち

エリザベス・キース (Elizabeth Keith) (1887-1956)

スコットランドに生まれる。姉とその夫でジャーナリストのロバートソン・スコットの誘いで 1915 年に来日。1917 年に名士の戯画的肖像画集を出版、展示したことで注目される。1919 年に日本統治下の「朝鮮」を訪れ、現地で制作した水彩画を三越で発表。これが浮世絵の手法で創作的な木版画の制作をめざしていた渡邊庄三郎 (1885-1962) の意向と一致し、以後渡邊の元で木版画を制作する。1921 年には渡邊による第 1 回「新作版画展覧会」に参加し、「朝鮮」の風俗、風景を出品した。以後も中国やフィリピンなど各地を広く旅し、作品はアメリカのフィラデルフィアやホノルルでも展示された。1924 年にはロンドンで大規模な個展が開かれた。1938 年に最終的に離日し、1956 年にロンドンで死去。《塗工職人》は題名不詳ながら人物の法被に「野村塗工部」の文字が見えるところから仮題として付けている。本作はラグーザ玉を「再発見」した畑正吉の旧蔵品で、キースから畑への献辞が画面下に書き込まれており、1932 年に贈られたことがわかる。また裏面上部に「Cut & painted by the artist」と書かれており、キースが自刻したとみられる。また異文化を女性や子供によって表すことが多いなか、生き生きとした日本人男性を画面に大きく描いている点でこの作品は異色である。

【主要参考文献】

Julia Meech and Gabriel P. Weisberg, *Japonisme Comes to America:*

The Japanese Impact on the Graphic Arts 1876-1925, Harry Abrams, New York, 1990. 日本語版は『青い目の浮世絵師たち アメリカのジャポニスム展』世田谷美術館、1990 年。
『アジアへの眼 外国人の浮世絵師たち』横浜美術館、1996 年。
畑山康幸「「アジアの旅人」エリザベス・キース—英国人女性浮世絵師誕生までの活動を追って」、瀧本弘之編『民国期美術へのまなざし 辛亥革命百年の眺望』(アジア遊学 146) 勉誠社、2011 年 10 月、p. 181-199。

バーサ・ラム (Bertha Lum) (1869-1954)

バーサ・ラムはシカゴ美術研究所のデザイン部を皮切りに、ステインド・グラスの工房など様々な経験を積むなかでジャポニスムにも触れ、また自身で木版画制作を試みている。1903 年に新婚旅行で初めて来日するが、版画制作を学ぶために再来日し、著名な彫師である伊上凡骨 (純蔵)、摺師西村熊吉のもとで本格的な修行をする。後には彫師、摺師を雇って制作し、木版特有の平面的な色面とぼかしを多用することで、幻想的な画面を作り出した。そこに表されたのは現実の日本とは遠い情景である。日本滞在後は主に北京で暮らした。

【主要参考文献】

Julia Meech and Gabriel P. Weisberg, *Japonisme Comes to America: The Japanese Impact on the Graphic Arts 1876-1925*, Harry Abrams, New York, 1990. 日本語版は『青い目の浮世絵師たち アメリカのジャポニスム展』世田谷美術館、1990 年。
『アジアへの眼 外国人の浮世絵師たち』横浜美術館、1996 年。

No.37

ヘレン・ハイド
《ソースパン・ショップ
(蘇州風景)》

The Sauce Pan Shop
明治 41 (1908) 年
木版多色摺・紙
25.4 × 37.9cm
実践女子大学香雪記念資料館



No.40

エリザベス・キース
《ソウルの東門》

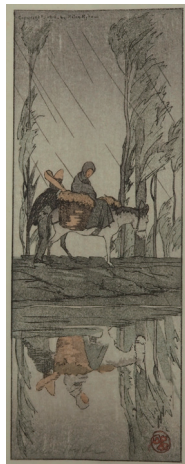
East Gate, Seoul
大正 9 (1920) 年
木版多色摺・紙
31.1 × 45.5cm
実践女子大学香雪記念資料館



No.38

ヘレン・ハイド
《市場へ》

Going to Market
大正元 (1912) 年
木版多色摺・紙
29.0 × 10.8cm
実践女子大学香雪記念資料館
(本作はメキシコの情景を表したもの)



No.41

エリザベス・キース
《夜店 蘇州》

大正 13 (1924) 年
木版多色摺・紙
38.4 × 25.7cm
実践女子大学香雪記念資料館



No.39

バーサ・ラム
《海の精》

Spirit of the Sea
大正 5 (1916) 年
木版多色摺・紙
45.1 × 30.7cm
実践女子大学香雪記念資料館



No.42

エリザベス・キース
《塗工職人》

大正時代
木版多色摺・紙
30.0 × 22.4cm
実践女子大学香雪記念資料館
畑正吉旧蔵



[解説パンフレット]

幻影の日本・憧憬の西洋

ー清原 / ラグーザ玉とヘレン・ハイドを中心に

発行 日 : 2024 年 10 月 15 日 (第二版)
編集・発行 : 実践女子大学香雪記念資料館
〒150-8538 東京都渋谷区東 1-1-49
<https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/>

・本パンフレットは実践女子大学香雪記念資料館企画展「幻影の日本・憧憬の西洋ー清原 / ラグーザ玉とヘレン・ハイドを中心に」(2024 年 10 月 5 日~11 月 23 日)に際し、発行するものです。
・本パンフレットの執筆は児島 薫 (実践女子大学香雪記念資料館 館長) が担当し、編集は三國 博子 (同学芸員)、矢野 綾香 (同事務職員 [学芸事務])、中嶋 真里 (同臨時職員 [学芸補助]) が補助しました。